

ドリームジャンキー

登場人物

ナヨ☆……ナヨとした青年

メガネ……メガネをかけた青年

???……声

女……女

学生①★……やや早口。学生②と喋っている

学生②……学生①と喋っている

学生A★……学生Bと喋っている

学生B……学生Aと喋っている

〈訛りレベル〉 ☆…ほんのり訛る。抑揚が少ない。★…やや訛る。抑揚を押さえて読む。
ちゃんにアクセント（お兄ちゃん）★★…訛る。助詞などに強いアクセント。★★★……
強く訛る。だべえ、や、濁音が入る。

●どこでもない場所

ナヨ （椅子に座り、汁椀をすすっている）

「……？」

「なあ」

??? （どこからか声だけが聞こえる）「どうしたの」

ナヨ 「これ、なんの味噌汁？」

??? 「ほうれん草と焼き海苔よ」

「血合いを除いた花かつおと利尻昆布のだしに、味噌は糀と白を半ずつ合わせたの。ほうれん草も焼き海苔も、熱で色が変わらないよう仕上げに加えたわ」

ナヨ （椀の中を見つめ、首をかしげる）

「でもこれ、青虫が入ってるよ」

??? 「……」

ナヨ （少し待つが、返事はない。椀の中のものを箸でつまみあげて眺める）

??? 「ごはんよ」

ナヨ 「え」

（受け取らないまま）「ありがとう」

●ゼミ室

ナヨ (長椅子に、メガネに頭を向けて横たわっている)

メガネ (壁際のパソコンデスクについて画面を見ている。時おり手元のマウスでスクロールしたりキーボードを打ったりしている)

ナヨ (メガネのほうをじっと見つめて)「なあ」

メガネ 「んー？」

ナヨ 「おまえさあ」

メガネ 「んー」

(振り向いてナヨを見る)「なんだよ」

ナヨ 「え、あ、……味噌汁の具で何が好き？」

メガネ 「組み合わせなら、ネギとさつまいもと油揚げ」

ナヨ 「はあ!？」

メガネ 「なに」

ナヨ 「ないないないない、ネギは良いけどイモはないわ。イモなんか味噌汁に入れたら腹に溜まってしょうがないじゃん」

メガネ 「あっそう……おまえはどうなの」

ナヨ 「なにが」

メガネ 「味噌汁の具」

ナヨ 「別に何でもいい。イモ以外なら」

メガネ 「なんだよそれ」

ナヨ 「なんかさ」

メガネ (隣から別の人物に話しかけられ、そちらを向いて応答する)

「ん? ……うん。……これは、ここの段階で変数条件を使うわけだろ、だからAからCを導く証明のA以外の仮定とCの中にXが自由に出現してはいけない。で、この場合はXがこれに束縛されているから、うん、そう」

(パソコン作業に戻る)

ナヨ 「味噌汁にさ」

メガネ 「ん、ああ」

ナヨ 「青虫が浮いてたんだ。細かい縞模様でさ、頭に目玉みたいな模様があって……」

メガネ (ナヨの言葉をさえぎるように語気を強く)「なに」
「また夢の話？」

ナヨ 「そう」

メガネ 「やめろって。前も言ったけど俺は他人の夢の話なんか聞きたくないんだよ。深層心理を無自覚に見せびらかされてるみたいで気味が悪い」

ナヨ 「ああ、うん、自分のゲロをわざわざ見せてくるようなもんだって言った」

メガネ 「覚えてんじゃん」

ナヨ 「……でね、オレンジ色のツノが生えてたんだよ。胴体の皮膚はマットな感じでふにっとしてるのに、ツノだけがツヤツヤなんだ。青虫って、もがいて苦しんで死ぬときはやっぱツノを出すんだな」

メガネ 「やめろってば！ ホント俺の言うこと聞かないよな。俺、別におまえの彼女でも母ちゃんでもないんだ、あれもこれも知りたいとかじゃないの。ゲロ見せられて喜んで、俺はしない。わかれよ。ていうか夢の話うんぬんよりそれまじで気持ち悪いからやめろ。味噌汁が食えなくなる」

ナヨ 「イモとネギの味噌汁？」

メガネ (眼鏡のブリッジを指で持ち上げ)「悪いか。人の好みだろ」

ナヨ 「ごめん」

メガネ 「まあ」

ナヨ 「すごい鮮やかな青虫だったから、グロいっていうのより、うわっビビッドだなあ！ っるのが先に来ちゃってつい話したくなるんだよなあ」

メガネ 「そっちか」

ナヨ 「なに」

メガネ 「謝ったのはそっちに対してか」

ナヨ 「他になんかある？」

メガネ 「いや……」

ナヨ 「俺の夢っていつもそうなんだ、音とか光とか感触とか全部ハッキリしてんの。太ももにすごい傷を負った夢を見たことがあるんだけど、切れた肉の壁どうしがこすれ合うみたいなムズムズした感覚とか、ほんとリアルなの。それまでひとつのものだった肉の塊が切り離されて神経のつながりがなくなると、途端にお互いが異物になるんだなって、そんな感じなのね。痛みはなくて、それ以外のことがぜんぶ鮮やかで、覚えてるよ。俺、そんなやばい怪我、やったことないのにさ」

メガネ 「……」

ナヨ 「知らない感覚を、どうして夢のなかで体験できんだろ。おかしいよね」

メガネ 「ついでに夢で童貞も捨ててこいよ」
ナヨ 「いいね、それ」

ナヨ 「ゲロといえさあ」
メガネ 「ああ？」
ナヨ 「こないだつつんと飲んだって話したじゃん」
メガネ 「ああ」
ナヨ 「なんか俺、調子乗ってウォッカいってたら吐いちゃったんだけどさ」
メガネ 「……」
ナヨ 「ショッキングピンクだったんだよね、すごい」
メガネ 「なにが」
ナヨ 「ゲロが。あんまメシ食わないで飲んでたからぜんぜん固体っぽさがなくてキレーだったよ。真っ白な便器にラズベリーみたいなん潰したようなとろっとしたのが、ばあ！
って」
メガネ 「また夢だろ。殴るぞ」
ナヨ 「違うって、それは現実！ たつつんに聞いてみ」
メガネ 「見せたのかよ、引くわ」
ナヨ 「現実、現実」
メガネ 「現実だったらそれ、何のピンクだったの」
ナヨ 「ハーゲンダッツかな」
メガネ 「季節限定？」
ナヨ 「たぶん」
メガネ 「俺あれのヘーゼルナッツが好きだったのにレギュラーに昇格できないまま気づいたら期間終わってた。なんで日本人はナッツと言えばマカダミアばっかもてはやすんだらうな」
ナヨ 「ああ俺ナッツ系だめだ」
メガネ 「……おまえさあ」
ナヨ 「え？」
メガネ 「おまえのそういうところ！」
ナヨ 「えー、なんだよ？」

メガネ (パソコン作業)
ナヨ (いつのまにか眠っている)

メガネ 「……そういえばさ」
「おまえがハマってるアレあんじゃん、いろんな場所でなんか捕まえるゲーム。
あれ、アメリカがこしらえた情報兵器だっつってロシアで全面禁止になったって」
(返事がないので振り返る。席を立ち、ナヨにそっと近づく)
「うわ」
(隣にいる人物のほうを向いて照れ笑い)
「俺けっこう長い独りごと言ってた感じになった」

女 (忽然と現れ、ナヨに近づき、ナヨの腹に触れる)
ナヨ (目をつむったまま宙に腕を伸ばす)
女 (その手を取り、ナヨの手のひらから肘のあたりまでを指先でなぞる)
(去る)

ナヨ (起き上がる)
メガネ (振り向いて)「あ、起きた？」
ナヨ 「あいつらは」
メガネ 「とっくに帰ったよ。時計を見ろ」
ナヨ (目線を上へずらし、うなり、また横になる)
メガネ 「ちょおっと」
ナヨ 「ん」
メガネ 「今、起きて、すぐまた寝るって、ないでしょ」
ナヨ 「んん……、いま見てたのがちょっとエッチっぽい夢だった気がするから、二度寝したら続きが見れるかも」

メガネ (便所に立つ)

メガネ (戻ってくる)
(ナヨの両腕をつかんで激しく揺らす)

ナヨ (起きる)
「ああ！ エロい夢の続きじゃなかった！」

メガネ 「帰るぞ」
(パソコンから USB 端末を取り出し、デスクトップから電源を切り、本をかばん

にしまい、机上手で払うように掃く)

ナヨ (その様子を眺めながら)

「おまえ夢の話は嫌だっつったけど、ちゃんと笑いどころのある夢ならよくない？」

メガネ 「おお、それならいいぞ」

ナヨ／メガネ (そろって部屋を出る)

ナヨ／メガネ (廊下を歩いて行く)

ナヨ 「中学か高校かわからんのだけどさ、小テストってたまにあったじゃない。古典とか英語とか」

メガネ 「つーか今もある。俺ドイツ語の授業は毎回小テストで始まる」

ナヨ 「うん、でも周りがみんなひとつひとつの椅子と机をきちんと並べてたし、制服っぽかったから中学か高校なんだ」

メガネ 「うん」

ナヨ／メガネ (エレベーターに乗る)

ナヨ 「でさ、テスト始めるぞーっつって解答用紙が配られんのね。あれって一番前の席のやつに一つ分ぜんぶ渡されて、それが順番に後ろに回ってくるでしょ。で、前からだんだんこっちに近づいてくるのが、ぼやあつとしてて輪郭はわからないんだけど、ひとまず白い色をしてるから、ああ解答用紙だなー、と俺は思ったわけ」

メガネ 「うん」

ナヨ 「そんで、いざ俺の前のやつが俺のほう振り向いて寄越してきたのがさ、……大根、だったんだよ」

メガネ／ナヨ (見つめ合う)

(エレベーターを降り、校舎を歩く)

ナヨ 「大根、よくない？」

メガネ 「うん……、そうだな、大根は良いな」

ナヨ 「な！」

ナヨ／メガネ (校舎外へ)

ナヨ 「おお、晴れてる」

メガネ 「これ晴れてるのか？」

ナヨ 「晴れてるだろ、星が出てるもん」

メガネ (メガネをかけ直して) 「俺は見えない」

ナヨ 「大根、絶妙だよな。ツルツとしてるし白いしそこそこでっかいから、書き込も

うと思えばやってやれないことないんだよ。他の野菜じゃそうはいかねえよ。そこで大根を選ぶ俺の夢のセンス、やばくない？」

メガネ 「うん、やばい。じわじわくる」

ナヨ (にこっと笑って)「良かった」

「あ、あそこ」

メガネ 「ん？」

ナヨ 「あそこめっちゃ吸い殻落ちてんの」

メガネ 「あそこだけ？」

ナヨ 「あそこだけ」

メガネ 「キャンパス内、全面禁煙になったもんなあ」

ナヨ 「うん。可哀想だよ、あそこくらい見逃してやってもいいよね。他の場所にはホントひとつも落ちてないんだよ。あそこだけ」

メガネ 「でもあそこ冬になったら丸見えだから、すぐ取り締まられちゃうだろうなあ」

ナヨ 「ああいうのってさ、敵をいっこ見つければそれで大勢が一致団結できるっていう、そういう収まり方なんですよ。ちょっと前まではあんなんじゃなかったじゃん。ネットの炎上みたいなもんだよね、このいきなり感」

メガネ 「政治だよなあ、政治」

ナヨ 「……あ」

メガネ 「ん？」

ナヨ 「俺がおまえに夢の話ばっかしたがるのは、おまえがそれを嫌がるからなんだと思う」

●講堂

ナヨ (机に突っ伏して寝ている)

メガネ (ナヨに近づき、起こす)

ナヨ 「ん」

メガネ 「もう終わってるぞ」

ナヨ 「んん」

メガネ 「次の授業の人らが来るから」

ナヨ (伸びをしながら、周囲をゆっくりと見渡して)「俺、いますごいダイブしてた」

メガネ 「……」

ナヨ 「こういうのってさ、現実の運動神経を夢のなかに持ち込んでたりするのかな？
俺のダイビングフォーム、完璧だったよ」
メガネ （腕を組んでナヨを見下ろしている）
ナヨ 「なんだよ？」
メガネ （去る）
ナヨ 「はあ？」
（荷物をまとめて席を立つ）

●どこでもない場所

ナヨ （座って紙に文字を書いている）
誰か（複数） （ナヨの周囲にバラバラに立っている）
ナヨ （書き上げたものを見て）「うわあ」

●ゼミ室

ナヨ （長椅子に寝そべっている）

メガネ （入ってくる）
（パソコンデスクの椅子に鞆を置いてから、ナヨに近づいて覗きこむ）
ナヨ （メガネの腕をつかむ）
メガネ 「タヌキ寝入りかよ」
ナヨ 「うとうとしてた」
メガネ 「夢は見たのかよ」
ナヨ 「わかんない」
メガネ 「見てないのか」
ナヨ 「覚えてないって」
メガネ （パソコンデスクへ）
ナヨ （起き上がって）「なんなんだよ」

ナヨ 「字がうまく書けなかった気がする」
メガネ 「……それだけか？」
ナヨ 「それしか覚えてないよ」

メガネ 「ふん」
ナヨ 「なに」
メガネ 「俺はもう夢の話を嫌がらないぞ」
ナヨ 「はあ？」
メガネ 「おまえは本当に性根が腐ってるな」
ナヨ 「何の話だよ？」
メガネ 「嫌がる俺を見て楽しかったかよ」
ナヨ 「……え？」
メガネ 「おまえのいいようには、もう、ならんよ」
(デスクに座ってパソコンを立ち上げる)
ナヨ 「……はあ!？」

ナヨ 「いや、何の話だ、それ」
メガネ 「おまえが言ったんだ」
ナヨ 「言っていない」
メガネ 「言ったじゃないか」
ナヨ 「俺は何も言っていない」
メガネ 「おまえが俺に夢の話ばっかしたがるのは、俺がそれを嫌がるからなんだと思う、
って言ったじゃないか」
ナヨ／メガネ (間)
ナヨ 「……え！ それ俺が意地悪で言ってたと思ってたの？」
メガネ 「……」
ナヨ 「いや、ばかじゃないの」
メガネ 「違ってたか」
ナヨ 「全然違う」
ナヨ／メガネ (間)
ナヨ 「……あのね、おまえは夢の話に対して、それは吉兆の顛れだとか、近いうちに
金運に恵まれるだとか、待ち人の暗示だとか、そういう怪しいこと言わないじゃん」
メガネ 「ああ、まあ」
ナヨ 「くだらなくね？ 夢占いとか」
メガネ 「そうか」
ナヨ 「そんな夢見るなんて疲れてるんだね、とか言われるだけでも俺、ゾッとするも
ん」

メガネ 「ふうん？ ……あんがい難しいな、おまえ」

ナヨ 「その手のことで盛り上がるの目的で食いついてきたりしないところに、俺は安心するんだよ、おまえのそういうところ、なんか。だから別に嫌がる顔を見るのが楽しいとか、そんなんじゃないよ」

メガネ 「そうなのか」

ナヨ／メガネ (間)

ナヨ 「……でも、だからってな、人の夢の中でたとえばちょっとからだ逆さまに持たれたくらいでぎゃあぎゃあ怖がっちゃう感じが、鬱陶しくないわけでもないんだぜ」

メガネ 「怖がっちゃいない」

ナヨ 「まあだから、正確に言うならだな、嫌がること自体は好きで、嫌がる態度ってか根拠はそんなに好きじゃないってことな」

メガネ 「……」

ナヨ (反応を促すようにメガネを見る)

メガネ 「わかりそうで、わからん」

ナヨ 「なんでえ？」

メガネ 「根拠、とは」

ナヨ 「だからさあ、俺が言いたいのは、要するにだな」

(ちょっと考えて)

「あのさあ、空を飛んだり高い場所から落ちたりってのはたいてい、実際のアトラクションだとか、車の窓から顔を出した時の風を切る感覚とかで未経験の部分の補填してるだけなんだよ。〈(ここだけわざとらしい重々しさで) 抑圧されたリビドーの発露〉とかじゃ、全然なくて」

●ふたつの部屋……それぞれにナヨ、メガネ

ナヨ 寝転がってスマートフォンをいじっている

メガネ タオルで髪や顔を拭きながら、パソコンデスクに向かう

メガネ (パソコンでメールを打つ)

※以下、同シークエンスでの台詞はすべてメール打ち込み動作(キーボード)を伴う)

「起きてるか？」

ナヨ (スマートフォンでメールを返す)

※以下、同シークエンスでの台詞はすべてメール打ち込み動作(タップ・フリック)を伴

う)

「起きてる」

メガネ 「おい、さっきの話で合点したぞ俺は」

ナヨ 「なに」

メガネ 「つまりな、肉体に蓄積された五感の記憶が材料になって夢が作られるなら、というのおまえの話は要するにそういうことだったんだろ？ であるならば、それこそ夢で童貞を捨てることもできるわけだよな」

ナヨ 「うー、できるのかなあ」

メガネ 「おまえの肉体が知っている唯一の快樂と、遥かにかけ離れたもんじゃないだろう」

ナヨ 「まあ、まあまあまあ。運が良ければできるかもね」

メガネ (ナヨからの返信を読みながら腕を組んで考える)

ナヨ 「夢って乱数列だとしか思っていないから。おまえと違って、俺は」

メガネ (理解した、という風にうなる)

「なるほど。確かに、それならいたしてる最中に相手の姿がたとえば大根になることだってありうるわけだな。……で、そうなっても、認めるしかないのが夢だよな」

ナヨ 「ん？」

メガネ 「いや、答案用紙が大根だったり裸の相手が大根になったりって、どう考えても現実じゃ許容されないことが受け入れられるわけじゃないか。夢のなかでは。あれって、脳みそがちゃんと起きてないからなのかと思うんだが、どうだろう？」

ナヨ 「そうだねえ」

(枕に突っ伏して、またゆっくり頭を起こす)

「いや、違うね。そもそも圧倒的に多数決で負けてるから。そこなんだよ問題は」

メガネ (わからないぞ、という風にうなる)

ナヨ (しばらくじっと考えてからスマートフォンに触る)

「夢のなかじゃいつも、夢の住人の解釈に身を任せているしかない。すごい自分が弱くなるでしょ。登ってる階段の先がなくなったりしてもさ、進むのを自分からやめたりはできないし、そういうの」

メガネ (足元に置いてあるペットボトルを取り、水を飲む)

ナヨ 「自分はぜったい当事者なのに、起こるものの確率に関与できないっていうか」

メガネ (ただの復唱。打ち込み動作無しで) 「起こるものの確率に関与できない……」

●大学ラウンジ

ナヨ (のんびり歩いている)

メガネ (ラウンジの奥に座って本を読んでいる)

学生四名 (学生①と②、学生AとBがそれぞれグループになって話している)

学生① (やや早口)「なんか14に同窓会、じゃないけど、そういうのがあって」

学生② 「え、14？」

学生A (男にチラシを差し出されてとっさに受け取り、チラシを見、すぐに顔を上げる)

「わー、今のカミノテクノの人だ」

学生① 「14」

学生② 「14 ねー？」

学生B 「誰？」

学生A 「なんかうちの大学で詩のサークルやってる人だよ、ソロで。なんか賞とか取っ
たらしい、去年とか？」

学生① (やや早口)「ね、なんか、そのほうが人が集まりやすいつて言われるけど私は
行けないかな」

学生② 「ふーん」

学生B 「知り合い？」

学生A 「いや全然知らないけど、図書館とかに無料配布の詩集置いてあるよ」

学生B 「え、それ読んですの？ 詩を？」

学生① (やや早口)「で、なんか焼き肉キングっぽいよね。飯電(いいでん)乗ってく
やつだから」

学生A 「読まないけど、知ってた」

学生B 「詩ねえ」

学生② 「やばい、それ厳しい」

学生① (やや早口)「厳しい。このへんの人たちみんなムリだと思うんだけどでもそう
なるらしい」

ナヨ 「おはよう」

メガネ 「起こることの確率に関与できない。つてのは、あれだよな、いかにもさ、(地
面を指差して)ここっぽいな」

ナヨ 「あー、そっか。いや、まあ、浜通りがな」

メガネ 「おう」

学生B 「前、【戦争史と安保研究】の先生がさ、期末レポート出す時に、「論文を書こうとは思わないように。なぜなら論文とは、論文という形式による詩だからです」って意味のことを言ってさ、俺はそんなとき、詩の本質ってそれなんじゃないかと思ったんだよね」

ナヨ 「……日本人ってさ、世界の平均で言ったらやっぱメンタル強いほうなのかな？」

メガネ 「なんで」

学生B 「数式の中にも詩はあるし気象記録の中にも詩はある。あ、その先生は、良い論文書くぞとか思わずにもっと実直に文章を書け、って伝えたかっただけなんだけど、まあ、詩は詩じゃなくても、どこにでも存在できるんだ。だから、わざわざ詩というジャンルを掲げるってことが、俺にはわからない」

ナヨ 「だってすごいじゃん、地震は来るわ、台風は来るわで」

メガネ 「まーでも台風発生のメカニズム的には海のある国ならどこも台風はくるわけだし」

ナヨ 「あ、レオとジュリアンの話、覚えてる？ 超笑えたよねあれ」

メガネ 「ふたりが寮の二段ベッドの上と下で寝てて？」

ナヨ 「地震が来たのに、レオ、それが地震だってわからなくて」

メガネ 「ジュリアンが下でふざけて揺らしてると思って怒った」

ナヨ (揺れるベッドを押さえようとするジェスチュアをしつつ、とても流暢に)

「What the fuck are you doing, Julien!? Just stop it!!」

メガネ 「あははははは」

ナヨ 「そりゃ、フランスには地震ないもんなあ」

メガネ 「おまえ、もう、おはようって時間じゃないぞ」

ナヨ 「あー」

メガネ 「単位、だいじょうぶか？」

ナヨ 「わからん」

メガネ (立ち上がる)

ナヨ 「購買寄っていい？」

メガネ 「ああ」

ナヨ／メガネ (ラウンジに併設された購買スペースに行く)

学生A 「詩に気づくために、詩学ができたんじゃないの？ 数式の中に詩があることを発見する人が欲しかったんだよ」

ナヨ (陳列棚を見ながら) 「俺きょう家でさ、さっきまで寝てたんだけど」

メガネ 「だろうな」

ナヨ 「どっぴり夢のなかにいるのに、ああもう一時だから起きようと思って起きたのね」

(商品を手にとって戻す)

「で、起きたら本当にきっかり一時だったんだけど、それでそんときは俺すげえ！ってなったんだけど、」

メガネ (ドリンクコーナーの冷蔵ケースを見ている)

ナヨ 「聞こえてる？」

メガネ 「俺すげえってなってから、どうした」

ナヨ 「俺すげえってなったんだけど今思うとそれって別にオプショナルなことではなくて、それよりも、そういうハッキリした意志を持った時ってまるで夢から溢れるというか、はみ出るように起きるなあ、と思った」

メガネ 「んー」

ナヨ (メガネに近寄り、冷蔵ケースの扉を開けてペットボトルを手取る)

「「夢のなかに居たければこれこれここまで以上の主体性を持つてはいけませんよ」っていう、臨界点があるんだと思う。それが今日の発見ね」

(商品を買うためにレジへ)

メガネ (購買スペースを出る)

「字が書けたら、それも臨界点なんじゃないか？」

ナヨ 「なに、字？」

メガネ 「字がうまく書けなかった夢を見たって言ってただろ。あれは字が書けない夢なんじゃなくて、夢のなかでは字は書けないことになってるんだと思うんだ」

ナヨ 「ああ、へえ」(ペットボトルの中身を飲む)

メガネ 「夢のなかで字をかけた試しは、俺にはない」

ナヨ 「……あれ、今おまえ自分の夢のこと言った？」

メガネ 「ああ」

ナヨ 「初めてだな」

メガネ 「うん、ヴァージンだ」

ナヨ 「うわあ……」

(購買で買ったものを食べる)

メガネ 「だから、字は、読んだり書いたり……」

ナヨ 「夢のなかだと、特に言語や数字……いや数字も言語のひとつに数えていいなら、つまりやっぱり言語なんだけど、とにかく情報処理がたいがいうまくいかない。そこに夢のシステムのミソがあるかもしれないね」

メガネ 「臨界点の話を合わせると、字を書けるってことは主体性の成就ってことだろう。それが不可能なんだから、つまり主体性は夢に奪われている、あるいは夢を見るためにはじめから手放している」

ナヨ 「どっちだろう」

メガネ 「どっちかなあ」

ナヨ (空になった包み紙をポケットに入れる)

メガネ 「ゴミはゴミ箱」

ナヨ (包み紙を捨てに行く)

ナヨ (戻ってくる)

「俺、でもノリノリで字を書いていたんだ。ふつうなら、字が書けていないならその時点でそれがわかるだろ。でも俺はスラスラ書いてるわけ」

メガネ 「それで？」

ナヨ 「おかしいだろ？」

メガネ 「おかしいよ。そりゃおかしいよ、夢なんだから」

ナヨ 「書いてることは、運動だ。運動は上手くできるんだよ。俺よく夢のなかでダイブするけど、すごくキレイに飛んでる自覚がある。でも運動の結果が変なんだ。運動と結果が道理で繋がらない。……だから俺たちはそのズレに参るんだ。乗り物酔いを起こすみたいになって」

メガネ 「だから主体性を手放すのか」

ナヨ 「わからないけど、たぶんだから夢の舵が取れない。道理の繋がりから外されるせいで、自分の座標を把握できないから。……足りないな」

メガネ 「え？」

ナヨ 「もうひとつ買ってくる」

メガネ 「ああ、じゃあ俺のも買ってきて」(財布を取り出し、ナヨに預ける)

ナヨ (購買へ)

メガネ (本を読む)

ナヨ (戻ってくる)

メガネ 「夢は俺たちにとって必要なものであるという前提を、とりあえず置いてみよう」

ナヨ 「脳の休息に必要だとかそういうやつ？」

メガネ 「まあ何でもいいけど、そうだな」

ナヨ (買ってきたものと財布をメガネに渡し、自分のものを開封する)

メガネ 「夢が人体に必要なものであるなら、ある程度は夢自体に夢を維持する力がある
と考えるのが妥当だろう」

ナヨ (ばくばくと乱暴に食べながら)

「要は、簡単には起きないようにするってこと？」

メガネ (指を鳴らす)「そうだ」

「夢が「起きないため」に必要な装置であるならば、その構造自体に主体性の発
現を抑制するプログラムが存在し、夢が主体性を奪ったと言えるだろう」

ナヨ 「むー」

ナヨ／メガネ (ふたりそろって食べる)

メガネ 「なんだよ。おかしいこと言ったか？」

ナヨ 「いや、言っていないと思うよ。ちょっと今、考えてんだ」

メガネ 「うん、すまん」

ナヨ 「夢が覚めるのは夢の臨界点が侵されること、つまり自分の存在が夢の世界にリ
ンクしてうっかり夢の舵が取れてしまうこと。とすると、夢は夢が消えないように、場面
の跳躍とか道理の通らない結果とかを用意してこちらとそちらの間にあるズレを保とうと
する。俺は夢の世界の確率変動に関わることが出来ないんだ、と錯覚させるために」

メガネ (自分の食べてるものを睨んで)「……何味なんだ、これ？」

ナヨ 「俺は味噌汁に浮かんだ青虫を食べることだってできたはずなんだ」

(空になった包み紙をポケットに入れる)

「あの青虫を見た瞬間、夢のほうが自分より強いと思い込んだんだ、俺の脳みそ
は。青虫は食べるべきだった。あるいは捨てるべきだった。どっちでもいいけど、俺は青
虫を打ち破らなきゃいけなかった」

メガネ 「打ち破ったら夢が壊れるかもしれないぞ。おまえの大好きな夢が」

(ナヨのポケットから包み紙を引っ張り出す)

ナヨ 「大好きだから、その先が見たいんだ」

メガネ 「わからん……」

(ナヨのゴミと自分のゴミを一緒くたにして丸める)